http://www.music-communication.com

神戸女学院大学

TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2022 年度 活動報告書

このプロジェクトは文部科学省 平成 21 年度 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。

音大連携による教育イノベーション：音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2022 年度　活動報告書

目　次

はじめに …… 2

教員・スタッフ紹介・2022 年度活動概要 …… 3

2022 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」

1．第 1 回　ワークショップと学習 …… 4
2．第 2 回　社会に求められる自己ブランディング …… 6
3．第 3 回　ようこそ先輩シリーズ①：ひとと音楽とわたし …… 8
4．第 4 回　社会と繋がるための芸術家としての心得 …… 10
5．第 5 回　即興はこわくない！～モチーフの展開と色々なスタイルを楽しもう～ …… 12
6．第 6 回　音楽に何ができるか …… 14
7．第 7 回　ようこそ先輩シリーズ②：ジュリアード音楽院の学びから世界の演奏活動へ
～お話と演奏をつくろう～ …… 16
8．第 8 回　簡単なコードで曲を弾いてみよう
～ポップスの演奏法から学べる体の動き・アレンジ～ …… 18
9．第 9 回　ようこそ先輩シリーズ③：音楽づくりワークショップ研修 …… 20
10．第 10 回　アートが共生社会の基礎をつくる
～インクルーシブアートワークショップの試み～ …… 23
11．第 11 回　学校で教えてくれない音楽 …… 25
12．第 12 回　総括 …… 27

各大学実習報告

1．東京音楽大学
「夏期特別セミナー」ならびに音楽作りワークショップ「音の展覧会」…… 29

おわりに …… 32

はじめに

東京音楽大学と神戸女学院大学音楽学部とが連携して取り組んできた共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も、2009（平成21）年のスタートから数えて 14 年目となりました。

今年度は、「音楽で社会とつながる～可能性・方法・問題・解決法を求めて～」という全体テーマの下、教育学、作曲、舞踊、即興演奏、インクルーシブ・ワークショップなど、多彩な分野で活躍されている講師をお迎えして、座学や実践による充実したご指導をいただきました。お蔭様で、時代に先駆けて遠隔での授業に取り組んできた蓄積がさらに生かされた１年となりました。

とはいえ、新型コロナ禍の影響は、今年度もさまざまな形で残りました。中でも、ロンドンのギルドホール音楽院から招聘する予定だった講師２名が、９月の来日に向けて努力してくれたにも拘らず、日本政府によって 10 月 10 日まで必要とされたヴィザの取得がどうしてもできず、結局、来日できないという痛恨事がありました。その代替として、東京音楽大学ではオンラインで２人から指導を受ける時間を設け、神戸女学院大学では、やはりギルドホール音楽院のリーダーシップ・コースを修了した卒業生の東瑛子さんから４日間、ワークショップの手解きを受けるという形で、学びの場を確保しました。

今年度も、さまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。1年間の活動内容をまとめた本報告書を、音楽・芸術・教育に関わる方々にご高覧いただき、未来に向けてのご助言をいただけましたらありがたく存じます。

2023（令和５）年３月

津上智実 (神戸女学院大学・名誉教授)

＊開講科目名
ミュージック・コミュニケーション講座Ａ・Ｂ（東京音楽大学）
ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）

教員・スタッフ（令和５年３月現在）

東京音楽大学	武石 みどり	東京音楽大学音楽学部	教授
	赤木 舞		非常勤講師
	坂本 夏樹		連携センタースタッフ
	稲寄 智秋		連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上 智実	神戸女学院大学音楽学部	名誉教授
	荒木 この美		連携ルームスタッフ
	小林 瑠那		連携ルームスタッフ

令和４年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

今年度の全体テーマ「音楽で社会とつながる～可能性・方法・問題・解決法を求めて～」

オリエンテーション：令和４年４月15日（金）	発信校：神戸女学院大学
第１回：令和４年５月13日（金）	発信校：東京音楽大学
第２回：令和４年５月27日（金）	発信校：神戸女学院大学
第３回：令和４年６月17日（金）	神戸女学院大学のみ
第４回：令和４年６月24日（金）	発信校：神戸女学院大学
第５回：令和４年７月８日（金）	発信校：東京音楽大学
第６回：令和４年７月22日（金）	発信校：神戸女学院大学
第７回：令和４年９月30日（金）	神戸女学院大学のみ
第８回：令和４年10月７日（金）	発信校：東京音楽大学
第９回：令和４年10月７日（金）、11月４日（金） 12月２日（金）、12月９日（金）	神戸女学院大学のみ
第10回：令和４年12月16日（金）	発信校：東京音楽大学
第11回：令和５年１月13日（金）	発信校：東京音楽大学
第12回：令和５年１月20日（金）	発信校：東京音楽大学

●その他の活動

令和４年９月18日（日）～20日（火）於：東京音楽大学
「夏期特別セミナー」ならびに音楽作りワークショップ「音の展覧会」

2022 年度　第 1 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 1 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップと学習」
講　師	苅宿 俊文（青山学院大学社会情報学部教授）
実施日時	2022 年 5 月 13 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	苅宿俊文氏は青山学院大学社会情報学部の教授であり、同大学ワークショップデザイン育成プログラムの代表を務められている。今回は、本講座で取り組もうとしているワークショップを、教育学の視点から、学習として捉える理論を学んだ。また、ワークショップにおける音楽の強みや、企画書を作成する際の極意、子ども達との接し方についてなど、幅広く講義された。 はじめに、音楽は私たちの生活に必須であり、音楽を専門的に学んでいる音大生は社会資本である。しかし卒業後に音楽から離れてしまう方が多くいることは社会的損失である。ワークショップという方法を通して、様々な人々に音楽の面白さや意味が伝えられるのではないかと語った。 私たち人間には、生まれながらに人と助け合う協働性や社会性が埋め込まれている。ワークショップはではそのような機能を上手く利用し、他者と協働して作品を創り出し、意味を生成することで、自己有用感を育てることができる。 続いて、3 つの視点から考えるワークショップの定義（1.「方法」としての定義、2.「目的」としての定義、3.「構造」としての定義）が紹介された。一つ目の「方法」としての定義は、「ワークショップは講義などの一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者自らが体験して、共同で何か学びあったり、創り出したりする学びと創造のスタイル」である。二つ目の「目的」としての定義では、ワークショップはコミュニティ形成（仲間作り）のための他者理解と合意形成のエクササイズ（練習）であり、自分の「当たり前」と異なる「当たり前」を持つ人とどのようにつながりを持っていくかが大切である。また出来上がった作品を見せ合ったり、鑑賞をしたりして「共有する」ことが「共同的な学び」につながり、自分と異なる他者への理解がワークショップの目的となる。三つ目は「構造」としての定義である。「〇〇を創ることで（活動目標）、〇〇を学ぶ（学習目標）」という仕組みから考えると、ワークショップでは音楽をすることが目的なのではなく、楽しんだり、音楽をやりながら仲間をつくったりすることが目的となることが説明された。「考える」「生み出す」ための仲間づくりには、自分たちがやっている「意味」を共有することが重要である。 ワークショップを学習として成立させるには、3 つの学習観（1. 行動主義学習観「できる」、2. 認知主義学習観「わかる」、3. 社会構成主義学習観「分かち合う」）の特徴と違いを理解することが大切である。ワークショップは 3 つ目の社会構成主義学習観に依拠している。1 と 2 の学習観は、学習者が自分 1 人であり、得られるものは知識という正解である。それに対して、社会構成主義学習観の学習者は自分と他者であり、正しい答えは得られないが協働することにより共同の中での納得解を得ることができる。知識が獲得されていなくても、経験を他人と分かち合うことによる意味の生成を大切にしている。

講座の概要	最後に、社会構成主義学習観の基となっているヴィゴツキーの発達の最近接領域について説明された。私たちには「ひとりではできない領域」、「支援者がいればできる領域」、「ひとりでできる領域」がある。教育として最も注目すべき領域は、「支援者がいればできる領域」である。この領域を広げていくことがワークショップを行う上で大切である。ワークショップの参加者はひとりでは音を楽しむことはできないが、リーダーが足場をかけることで、参加者が音楽を楽しむことができる場へと変えることができる。子どもができない領域からできる領域に移っていけるように、どのように足場をかけるか、これがワークショップデザインである。 まとめとして、「ワークショップは学習である。」という言葉が印象的であった。

〈学生のことば〉

・「ワークショップは知識を得なくても意味を作り出す」という言葉に全てが詰まっていると感じました。アクティブに、他者と共同して人間として必要な本質の部分に触れながら納得解を生み出す作業は、社会生活において欠かせないワークだと改めて感じました。楽しく、そして１人では得られなかった考えが生み出されたり、脳が活性化されたりするワークショップをどう取り入れるかということを、人と人の繋がりの中で私も大切にしていきたいと感じました。なかでも、勉強は人に還元するためにある！という言葉が響き、私も今まで音楽を通して得た学びを誰かに伝え続けられる人になりたいという目標が生まれました。
（東京／ピアノ／４年）

・今回の講義では、ワークショップの定義から本質的なことについてまで、幅広く教えてくださり、とても勉強になりました。これから企画書を考えていく時に、「３つの視点から考える定義」というのをうまく使い、企画を立てていきたいです。「発達の再近接領域」の話の中であった「できそうでできない、けれども自分の力が広がってきていると実感できるワークショップ」というのは、自信にもなるし、達成感にもなるので、大切なことだと感じました。今すぐにはできなくても、私ならではのワークショップの世界観、オリジナリティを生み出せるようになりたいと思いました。
（東京／ヴァイオリン／３年）

・講義の冒頭の「音楽大学の卒業生が将来音楽に携わらないことは、社会資本として損失である」というお話に、ぐっと惹き込まれました。ワークショップの定義と意義について、深く考えさせられる大変有意義な時間になりましたし、物事を多面的に捉える重要性を改めて痛感しました。私はワークショップそのものに対して関心があったわけではないのですが、自己有用感や自己効力感への影響、学習観におけるワークショップの立ち位置や、そこにある「楽しい」に対する姿勢など、以前から気になっていた分野をかすめ、興味をそそられる内容ばかりでした。勉強は自身の知的好奇心を満たすためだけでなく、人に還元するためのものであることを心に留めて、学びを自己完結させることのないよう、これからの大学生活を過ごしたいです。
（神戸／MC／１年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2022 年度　第 2 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 2 回ミュージック・コミュニケーション講座 「社会に求められる自己ブランディング」
講　師	八木澤 教司（作曲家、神戸女学院大学専任講師）
実施日時	2022 年 5 月 27 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部会議室（講座発信校：神戸女学院大学） (Zoom で東京に同時配信)
講座の概要	第 2 回「ミュージック・コミュニケーション講座」は、作曲家で本学専任講師の八木澤教司氏を迎えた。八木澤氏は武蔵野音楽大学作曲学科卒業、同大学大学院音楽研究科修士課程修了。東日本大震災復興シンボル曲「あすという日が」がNHK 紅白歌合戦で歌われる他、2019 年の天皇陛下御即位奉祝記念式典・国民祭典、東京 2020 パラリンピック開会式において作品が抜擢、ヨーロッパで歴史的権威のあるスペイン・バレンシア国際吹奏楽コンクールの課題曲に作品が選定された。 作曲・編曲ができる人はたくさんいるが、それだけではこれから先の時代は難しくなっているのが現状である。「演奏＋何ができるのか」を考えることが重要だ。すばらしい、うまいなどという感覚的なものではなく、大きな範囲で社会一般から見た場合はどうなのか。良い成績を収めることは大切だが、肩書きがなくても決して自信をなくす必要はなく、がんばりや考え方次第でこの世界では成功できるのではないかと述べた。 世の中には代わりのいる仕事が多い。組織で働く人は安定も補償もあり、社会的にはいい地位だ。組織で働く人は固定給で安定しているが、それ以上はない。一方、特殊能力を使って働く人は、アイデアややり方次第で収入の限界値がなく、よりおもしろさを感じて働くことができる。今の世の中はコロナ禍の影響もあり、安定した職業がなくなってきている。だからこそ、自分自身のスキルをどれだけ高めていけるかが、今後はさらに必要になってくるという。 八木澤氏は大学時代、「音楽で食べていこうなんて甘い」と言われ続けたそうだ。音楽は目に見えない分、お金にすることが難しく、社会では音楽で稼ぐことは理解されていない。しかし、八木澤氏は「音楽で生活は成り立つと考えている。自分は取り分け才能があったと思っていない。だが今考えると自分自身、自己ブランディングができていたからこそ、今まで活動してこられたように思う」と語った。 次に、八木澤氏の活動に関する話題に転じた。 八木澤氏は、「吹奏楽が社会にどのように関われるか、教育音楽である合唱がどのように関われるかということを意識して活動してきた」と述べた。 大学院 2 年生のとき、「21 世紀の吹奏楽饗宴」というイベントに曲を採用されたことが、デビューのきっかけだった。デビュー後は色々な人と人脈を作り、積極的に行動し活動の場を広げた。活動が日本だけではなく海外にも広がったころ、語学にとても苦労をしたそうだ。八木澤氏は「言語がどんなにできても絶対にいい人間関係を築けるわけではない。大切なのはコミュニケーション力。語学が苦手でも伝えたいという思いがあれば、人には伝わる」と発想を変えて活動していた。そうすると海外での仕事も増えたそうだ。 コロナ禍のタイミングで、本学の講師に着任した。Zoom を用いたオンライン授業では、対面の授業とは異なる部分が多く、とても苦労をしたそうだ。

講座の概要	しかし同時に、これまでの経験をオンラインにおいても活かせないかとYouTubeを活用するようになった。ここでは、色々な人の相談にのったり、自身の経験談を配信するなどの試みを行ったそうだ。八木澤氏は「誰もやっていないことを真っ先にやる。これこそ自己ブランディングの１つではないか」と述べた。 音楽の中だけで仕事をすることは難しく、予算が限られている世界なので、音楽以外の所にどのように関わっていくか、物事を様々な視点から考えることが大切である。人脈や経験を活かすことができれば仕事は無限大に膨らむので、鋭い視点とそれらをリンクさせる力が必要だという。 仕事をするにあたって重要なのは、「この人と仕事がしたい」と思ってもらえることである。よく見せようとし過ぎると表面的なものになってしまう。個性があるから反論もあり、否定的な意見からも学ぶことは重要である。色々な人の考えや、色々な人を想定したコミュニケーションが重要なのだと語った。 最後に八木澤氏は、「もし、作曲だけで活動していたらうまくいかなかったと思う。色々な活動をする中でやるべきことを勉強し、色々な人と関わること、経験をすることが大切だ。音楽だけで仕事を見つけようとしないで常に客観的な視点を持ち、経験した知識をリンクさせることが重要である」と講座を締めくくった。

〈学生のことば〉

・自己ブランディングは専門学校に通っていた時期に少し学んでいたのですが、何をどうブランディングしていけばよいのか分かりませんでした。なので、今回の講義を聞いていてかなりのチャンスを見つけられずに逃してしまっていたのではないかと思いました。学生のうちに、卒業後に少しでも活動しやすい環境を作るために、たくさんの経験と、成功や失敗から学ぶこと、いろんな分野の先生と会話して、できるだけ沢山の場所に種を蒔いておくことは今からできることなので、積極的に取り組んでいきたいと思いました。音楽以外の「特技」と言われると少し言葉が詰まるのですが、「好きなこと」だと色々と出てきそうなので、そういった自分の周りに話していないことをたくさん話しておくことも重要に感じました。

（神戸 / 声楽 / ３年）

・「音楽は目に見えないためにお金を払うことに抵抗を持つ」という視点は、音楽に携わる側にとって欠けてしまいがちなものだと思います。音楽学校などに身を置くと「他の何かではなく音楽を選択してきた人」が当たり前になってしまうので、異なった価値観の存在を忘れないようにしたいです。また、八木澤先生の講義を受けて、やはり人との縁は大切にすべきだと再確認しました。「この人と何かをやりたい」と思ってもらえる存在になることは、仕事だけでなく人生において大切なことだと思いました。（神戸 / 作曲 / １年）

・実際に先生が体験したことを聞くことができて、フリーで仕事をすると、どういう動きをしなければいけないのかを知ることができ、勉強になりました。私はすぐ行動に移せるタイプではないので、「やってみる」という精神をできるようになりたいと思いました。踊りで仕事をするためにも、踊り以外で何が自分の強みになるのか、どういうことがやりたいのか自己分析をしようと思いました。（神戸 / 舞踊 / ４年）

・専門スキルが高ければよいだけではなく、コミュニケーションによる人脈の広がりも仕事を増やせる大切なポイントなのだとよく分かりました。自分自身、コミュニケーション力が弱いので、音楽の仕事に向いていないかなという心配もありました。コミュニケーション能力を上げるのも今後の課題として努力したいと思います。

（東京 / ピアノ / １年）

2022 年度　第 3 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 3 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ①：ひとと音楽とわたし」
講　師	山田 絵梨香（神戸女学院大学音楽学部卒業生）
実施日時	2022 年 6 月 17 日（金）14：00 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部会議室（神戸女学院大学のみの授業）
講座の概要	第 3 回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、「ようこそ先輩シリーズ」の第 1 回で、神戸女学院大学のみの講義として、卒業生の山田絵梨香氏（M131 回生）を講師に迎えた。 山田氏は高校 3 年生のとき、神戸女学院大学の音楽学部への受験を決め、そこからピアノや声楽を学び始めた。今まで専門的な音楽教育を受けていなかったからこそ、音楽が好きで勉強したいという気持ちと、演奏を極めること以外の音楽への興味があった。 本学の授業で心に残っているのがこの「ミュージック・コミュニケーション講座」と「音楽によるアウトリーチ」の 2 つで、これらの授業から音楽をツールとして人とつながる楽しさを体感し、もっとやってみたいという思いが募ったという。 ４年生のとき、本学の「アート・マネジメント講座」で、兵庫県立芸術文化センター（以下、芸文）のインターンシップに参加したことがきっかけで、卒業後に芸文の事業部に入職した。 芸文の事業部制作担当課では、芸術文化に親しんでもらえるような企画や、地域活性化イベントの企画・制作、ホールのロビー展示など、演奏者ではなくスタッフという立場から音楽に携わり、その場に音楽があるから人が集まって、そこに自分がいるということに喜びを感じたそうだ。 2017 年、芸文の演劇事業に関わるようになり、記者、メディア対応、芸能関係など、華やかな場所での仕事が多くなった。ここではいかにしてチケットを売るかを考えるなど、お金のために公演をやっているというくらい、現実的な問題ばかりの仕事であったという。 本質をとらえて仕事をすること、物事の優先順位を見誤らないこと、という自身のモットーとかけ離れていることに気が付いた山田氏は、本当はお客様が喜ぶための仕事がしたいのだと再認識したと述べた。 そうして始めたのが、障害者施設へのボランティア演奏だった。 プライベートで間近で人と音楽で関わりたいと思い立ち、ひとりでウクレレを持って演奏へ出向いた。これによって、自分の存在意義を確認し、劇場の仕事は自分でなくともできるが、この演奏活動は私にしかできないと考えるようになった。 そして、芸文との 5 年の契約期限を終えたことをきっかけに、芸文を退職し、音楽療法士としての道を歩み始めた。 音楽療法には、不安や痛みの軽減、自発性の促進、脳の活性化やリラクゼーション効果があり、学生で経験した「アウトリーチ」との強い結びつきを実感したそうだ。ただ、これらを仕事としていくのには、自らの福祉に対する知識のなさや、経験がないことにも気がつき、福祉の勉強をするべく、社会福祉士を目指し始めた。 社会福祉士の国家資格を得るため、カリキュラムを受講し、実習を経て、現在は株式会社コペルにて社会福祉士と音楽療法士としてのスキルを発揮している。

講座の概要	2020 年からは、同社のコペルプラスジュニアにて、発達面での不安を抱える子どもたちのための発達支援スクールで児童指導員として働いている。 山田氏は、いろんな要素を持っている音楽をツールとして、社会のどこで活かしていくかを考えるのが、自身の役割であると述べ、どこに音楽が活きているか、音楽が行き届いていないところはどこかを常に意識しているという。 この世の中で、一体どこに音楽が必要か、また、音楽とともに何ができるかを自身に問い続けること、それが人と音楽と私を繋げることだと熱く語った。

〈学生のことば〉

・学生時代の経験も踏まえながら、どの時期にどのようなことを感じ考えていたかを伝えてくださったことで、「こう思ったからこうした」という山田さんの行動に終始納得してお話をうかがうことができました。教職を取るか迷っていた私にとって、生活のことを考えて先生という職を選ぶのはいささか安直ではないか、という言葉が特に胸に刺さりました。しばらく悩んだ末、先月私は教職を取らないことに決めました。今後先生という職業に向けて舵を切ることもあるかもしれませんが、今は生活のことはとりあえず置いておき、引き続き自分が本当にやりたいこと、できることを考えたいです。（作曲 / １年）

・一見すると音楽と関係のないように思える社会福祉士のように、音楽を使って人に貢献できる仕事は、探せばたくさんあるのではないかと感じました。自分の小さい見方の世界に留まらず、自分が何をして社会で生きていきたいのかを、いろんな視点から吟味して職場を探すのも一つの手だと思いました。経験は形を変えてでも未来の自分を助けてくれるという言葉から、学生の内にできることをできる限りたくさん挑戦していきたいと思いました。（声楽 / ３年）

・とても内容の濃い講座で勉強になりました。私と価値観の似通っている部分もあって興味深い講座でした。私は広島にフラメンコを習いに行っていますが、その先生と一緒に呉市の障害者施設でお手伝いさせて頂いています。山田さんがそのような方とも接していると聞いて勉強になりました。（ピアノ / １年）

・今回のお話を聞いて音楽を使って何かを伝えられることが分かり、コンサートホールで演奏するだけが音楽ではないと再認識しました。芸術としての音楽だけでなく、音楽をツールとして使えることを学びました。社会で音楽を生かしていける方法を考えていきたいと思いました。（ヴァイオリン / ４年）

・山田さんのお話から、このＭＣ講座での経験や学びを将来に繋げて活かしている方が実際にいることを体感しました。音楽に携わる身として、音楽との関わりを将来社会と共有することができる一人の学生として、このＭＣ講座をはじめとした大学での経験をとりこぼさぬよう身を引き締めたいです。得た経験をもとに自分ができる音楽の活かし方について考えていこうと思います。（作曲 / １年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2022 年度　第 4 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 4 回ミュージック・コミュニケーション講座 「社会と繋がるための芸術家としての心得」
講　師	島﨑 徹（振付家、神戸女学院大学教授）
実施日時	2022 年 6 月 24 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学　エミリーブラウン館 B スタジオ（講座発信校：神戸女学院大学） (Zoom で東京に同時配信)
講座の概要	第 4 回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、振付家で本学音楽学部舞踊専攻教授の島﨑徹氏を迎えた。 島﨑氏は、日本での幅広い活躍はもちろんのこと、世界一のバレエコンクールであるローザンヌ国際バレエコンクールにおいて、審査員やコンテンポンラリー課題曲の振付けを行うほか、アメリカ、パリ、ベルギーなど世界中の一流カンパニーからのオファーが殺到する振付家である。 ３度目となる今年度の講義では、芸術家として心得ていることや、実体験から気が付いたことなどを主に語った。 今年、宝塚歌劇団で島﨑氏が振付を担当した演目の再演を行うため、改めて振付を担当したそうだ。今回、再度振付を担当して、言語的表現の奥行きの限界と、情緒的表現の可能性の大きさを感じたという。 我々の情緒的表現は、アジア的感覚であるということを自覚しなければならない。芸術というものを、いつしか芸能というものに変えてしまっている危険性があると述べ、島﨑氏は「芸術というものを、お客さんのために芸能に変えてしまうのは間違いに思う。今の世の中は、自分が表現するものが二の次になってしまっている。私は芸術をやりたいのだ」と熱く述べた。 我々は西洋の中で認められること、自分たちの作る創造が本場の方の心に残ることを目標にやっている。もっともタブーであることは、本場の物を真似することだ。 島﨑氏はオリジナリティが価値として認められる場所があること、人と違うことを上手くやれば仕事などにも繋がるということを信じるのに、25 年以上かかったそうだ。「我々は、西洋の物を自分の中に取り入れ、東洋人である自分というものを昇華させ、その中から、しっかりとした自分のアイデンティティというものを含みながらも、自分がやっている芸術形態の中にあるもので勝負している。自分にしかできないことをやるからこそ、自分で自分を認めることができる。つまり、今まで培ってきた自分の中にあるエッセンスを絶対に失ってはいけない。自分の本質をしっかり持ちながら技術を習得しないと芸術にはならない。これを守ることが芸術家として大事な心得の一つである」と熱く語った。 我々人間は、本来、大きな才能と豊かな感性を持っている。問題は、その才能を自分で見つけられるかどうかだ。情緒的な部分のエッセンスを自分のアートに組み込んでいくには、自分のオリジナリティが必要だ。つまり、やり方なんて決まりはなく自分で見つけて自由にやることが大切で、失敗しても答えが見つかるまで生み出せばいいのだ。ただ、作り上げるだけではなく形になったものや、築き上げてきたものを崩す勇気は必要だという。「壊しては作る」の作業を繰り返し、いつか社会と結ぶ道に繋がると信じることが、今我々にできることだという。

講座の概要	島﨑氏は「自分の中にあるものを表現し、人の心を動かすことはすばらしいことで、それが人の力にもなる。自分の芸術を通して、人の心を動かすというこの感覚を得たら、自分自身も快感になるのではないか」と述べた。 最後に、島﨑氏は「私はとにかく今よりもっといい振付を作ることを心掛けている。皆さんに伝えたいことは、いくつになっても変われるということを信じること。自分のいる場所がどんなに酷くて、自分の精神状態がどんなに悪くても変われると信じることが重要なのだ。それが皆さんにとっての美になる」と学生たちを激励した。

〈学生のことば〉

・音楽の無限性を改めて再確認しました。私は、作られて技術を研鑽し抜いて、音楽や振り付けの解釈を突き詰めた上での表現のバレエ、門戸を広く開いているミュージカル、どちらも好きですが、先生がコンテンポラリーとミュージカルの違いはジブリとディズニーの違いとおっしゃった時、目から鱗でした。私は、フラメンコをしておりますが、ピアノであっても踊りであっても歌であっても、パフォーマーは表現媒体であって、情緒や時代背景などを体という楽器を通して、伝えるのが役目だと思っています。どれだけ完璧なテクニックを見せられても、「すごい」以上のものを感じられません。バレエやピアノなど、ある程度良しとされている形が決まっていて、作り上げて、作り上げて仕込まれて突き詰めて忠実に再現するというものも一つの表現なのですが、私はフラメンコのように表現したいことの自由がある、どのような解釈でも許される、どのような形であっても音楽である踊りは魅力的だと思います。自分自身、踊り手歌い手演奏者というより、表現者でありたいと思います。（神戸／ピアノ／１年）

・今までの学習の仕方、自分を見直すきっかけになる授業でした。私は勉強でも実技でも周囲と比較して自分がどれだけできるかで一喜一憂していましたが、これは結局その時だけのもので、何にもならないことに気づきました。自分が音楽をやりたいと思ったきっかけを、忘れて、目先のことばかりに気を取られていたので、正しいか正しくないかではなく、何が自分にとって良いと思うものなのか、これは違うと思うものなのか、分けて良いと思ったものをより研磨し、違うと思ったものは躊躇なく壊すということを、自分の中でやっていこうと思います。自分の中のアイデンティティを理解していくために自分の正直な心の声に耳を傾けていきたいです。（神戸／声楽／３年）

・「言語的表現について以前は羨ましく思っていたが、今は限界を感じる。逆に情緒的表現の可能性の大きさを改めて感じた」と仰っていましたが、私もこの境地に至りたいと思い考えてみました。以前から私も、「言葉のある音楽と、ない音楽から受ける感動は何が違うのか」ということについて、疑問に思い考えていました。言葉があることにより、ある程度作曲者側からの感情の誘導を受けるのであれば、音楽のみの情緒的表現は、感情の行先を指定せず、あるがまま感じていることこそが正しいということなのでしょうか。しかし、曲は考えて創られている為、作曲者側の誘導が全くないとは言えません。また、演奏者の存在も無視はできません。演奏者は何かしら訴えを持って演奏をするわけですから、それも感情の誘導に関わります。私も自分で考えた結果、『「感情の所在がどこにあるか。自分の感情であることが正しい」わけでなく、「表現の世界の幅の広がりを受け手が感じられること」』だと思うと納得がいきます。大きな波の絵画があったり、ボトルシップのような繊細な造形物があったり、ミクロとマクロの世界で表現は多様に存在しています。自分が実際に経験していない感情も、芸術に触れることで感じることができます。未知のものを自分が知ることができた時、未知だったのだと気づいた時、一気に世界が広がる感覚が受け手一人一人の心を豊かにさせてくれると思います。芸術を豊かにする、それは生活が豊かになることに繋がるのだと考えます。（東京／ピアノ／４年）

2022 年度　第 5 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 5 回ミュージック・コミュニケーション講座 「即興はこわくない！～モチーフの展開と色々なスタイルを楽しもう～」
講　師	渚 智佳（ピアニスト、東京音楽大学講師）
実施日時	2022 年 7 月 8 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	ピアニストで東京音楽大学講師の渚智佳氏を迎えての実践を中心とした即興の講義は、日頃クラシック音楽を学んでいる学生たちにとって即興演奏を体験する良い機会となった。 まず導入としてボディーパーカッションでのリズムづくりに取り組んだ。渚氏が提示したリズムを模倣して繰り返すコール＆レスポンスを行った後、1 人ずつリレー形式で即興的にリズムを繋げていくことにも挑戦した。次にメロディー即興として歌でメロディーを繋いでいくことに取り組んだ。渚氏が「ドレミー」とはじめの節を提示し、「ソーラーファー」→「ファーミレド」と学生たちが順番に口ずさみながら旋律を作っていった。学生たちは即興的にリズムやメロディーを生み出さなければならないことに動揺しつつも止まらずに続けていくことができていたが、四分音符と二分音符の組み合わせや、前の節から外れないようにハ長調の音階内に収めるなどの単純なものが多かった。 渚氏は、即興演奏とは前の節を受けて影響されたり、あえて新しいものを加えたりすることであり、間違いは無いとした上で、即興に慣れるためには自分の引き出しを増やすことが大切だと述べられた。様々なリズムパターンや音の動き、コードなどが頭の中に浮かぶようにする必要があるとのこと。また、スタッカートや強弱など表現を加えることも音楽を発展させていく上で重要だと説明された。何度か即興でのメロディーづくりに取り組むことにより、リズムや音程のバリエーションが増えていき、より音楽要素の多いメロディーを作れるようになっていったように感じた。 次に渚氏は学生がランダムに提示したソ、シ、ド♯の音から発展させていく即興演奏を披露された。素材となった音の減 7 の響きを強調しながらも、リズムを変えてワルツやポルカ風にしたり、ド♯をレ♭に読み変えて長調の明るい和声に変化させたりなどバリエーション豊かな即興演奏であった。速度や強弱などで雰囲気を変えて表現の工夫もされていたとのこと。 最後に学生たちも楽器を用いた即興演奏に挑戦した。渚氏から①ミ、ソ、レ②ファ♯、ド♯、シ③シ♭、レ、ラの 3 つの素材が提示され、全ての素材を使っての即興演奏に5,6 人のグループに分かれて取り組んだ。伴奏形として一つの素材を使い、残りの素材を組み合わせて旋律を作ったグループ、一つの素材をメインテーマにして他の素材はアクセントのように活用したグループ、演奏に身体での表現を加えるグループなど各々アイディアに溢れた作品が出来上がった。 まとめとして、この講義で体験した即興のアイディアのカケラをもっと発展させてくことで、より豊かな音楽づくりや、即興の引き出しを増やすことができると述べ、講義を締め括られ、即興演奏に慣れるためには続けていくことが必要だ

講座の概要	と実感した。今回の講義を入り口として、日々の練習の合間に即興演奏を楽しむ時間を設けることでどんどん力になっていくと思う。

〈学生のことば〉

・即興と聞くととても難しいイメージが強く、即興でなにかをやるのがとても苦手であるが、今回の授業はおもしろかった。みんなで音を繋げていく即興は、前の人がどんな音を発するか、事前に予想できないため､その場で考える必要があったが、特に難しいことは考えずに自然にできたので楽しかった。今まで即興的にピアノを弾くということをやったことがなかったが、今回やってみて旋律だけならなんとかなりそうなので、遊び感覚で自分もやってみようと思った。
（東京 / 音楽文化教育 / ３年）

・先生の授業は昨年１度だけ受けたことがあったが、その時の印象が強く残っているほど、先生の即興演奏は素晴らしいと感じた。今回はさらに近くで聴くことができ、感動した。伴奏部分を決めて、それに合わせて自然と新しい旋律が演奏できる、自分でも先が予測できない即興演奏はとてもおもしろいものだと感じた。みんなでもっと色々な楽器を使って、即興で曲を作るということをやってみたいと感じた。　（東京 / ピアノ / ３年）

・即興の授業を受けるのは初めてだったが、演奏する人によって個性がはっきり見えるように感じた。テーマを柔軟にとらえる頭脳の柔らかさが必要になることも勉強になった。わたしは以前ソロで即興演奏をやったことがあったが、今回、複数人でそれぞれの考えを上手く結合させてお互いが納得のいくものを作るのはとても難しく感じた。今回学んだことをこれからの演奏に活かしていきたい。　（東京 / MLA / １年）

・即興の講義を初めて受けて緊張したが楽しかった。即興をどのようにするのか漠然とした考えしか持っていなかったが、バリエーションであるとともに、かなり融通の利くものなのだと、自分なりに理解した。神戸女学院の方の美しい歌声やそれに乗せた独創的な舞踊は、目でも感じることのできる即興で、凄かった。実際に即興をやるとなると、決められた音があるとはいえアドリブがあまりできなかった。日々の積み重ねによる感覚の慣れが大事だと仰っていたので、楽器練習の休憩や飽きた際に適当に音を決めて、即興遊戯をしてみようと思う。　（東京 / クラリネット / ３年）

・今まで即興演奏に抵抗があったのですが、今回の講座で即興には正解はなく、音の高さや音の並びによってさまざまな音楽が作れる多様性があることを知りました。即興は、その人の個性やセンスがそのまま現れる、誰にもまねできない世界観が魅力的だと思いました。
（神戸 / ヴァイオリン / ２年）

・即興で何かを人前でするという時には、とても勇気が必要だなと感じました｡それと同時に即興は、正解もないと思うので、自信を持ってすることも大事だなって感じました。順番に発表していく時に、無意識に前の人と関連したりするのがおもしろかったです。また、なかなか交流がない受講生同士でいきなり即興することは、初めてでしたがそれはそれで探りながら、即興するのも楽しかったです。　（神戸 / 舞踊 / ４年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2022 年度　第 6 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 6 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽に何ができるか」
講　師	なかにし　あかね（作曲家、神戸女学院大学音楽学部教授）
実施日時	2022 年 7 月 22 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部オルチン館（A313 室）（講座発信校：神戸女学院大学） (Zoom で東京に同時配信)
講座の概要	第 6 回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、本学音楽学部教授で、作曲家のなかにしあかね氏を迎えた。 なかにし氏は、東京芸術大学音楽学部作曲科を卒業後、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ大学院にて作曲修士号、キングスカレッジ大学院にて作曲博士号を修める。また、歌曲、合唱曲、ピアノ独奏・連弾作品、室内楽作品など、これまでに出版された楽譜は 100 冊を超えている。宮城学院女子大学教授を経て、2020 年 4 月より神戸女学院大学音楽学部・同大学院教授に着任した。 音楽とは、時間の芸術であり、音楽を聴く時間は非日常であり、人々の時間の中に非日常を届けることが音楽を届けることだという。 しかしながら、2011 年 3 月の東日本大震災において、圧倒的な災害に対して、音楽が直接できることはなく、物理的なことは何もできず、音楽は無力だと認識したと述べた。 日常が非日常と化してしまっている状況においては、「音楽の力」は無力であり、音楽は「楽しみ」であることから、「楽しむ」ことが不謹慎だと感じる被災者の方々が存在し、日常を取り戻したいと願い始めるとき、音楽が求められ始めるが、そのタイミングは人それぞれであると語る。 なかにし氏は、宮城学院女子大学での在任中、宮城県をはじめ、被災した多くの場所で復興支援活動を行った。 避難所などに演奏を届けるだけではなく、楽器や楽譜を届け、被災地でともに演奏する機会を作り、現地の学校や団体を招待して現地の人と人とのつながりを作ることに力を入れ、「歌おう！共に！」という企画のシリーズ化を行った。 この「歌おう！共に！」シリーズでは、自分で企画するのではなく、現地の人が企画するからこそ尊いものであると考え、現地からの要望に対して、どのように実現させるかなどサポート面に特に尽力した。 復興支援活動を行うなかで、はじめはこれらの活動にかかる金銭面については、全て自らの持ち出し、負担であるべきだと考えていた。しかしながら、とある時期から、現地から謝礼の支払いについて申し出があったという。なかにし氏は、復興支援と名の付くもので謝礼が発生することはないと考えていたが、「復興の証だから受け取ってほしい」と言われ、ハッとした。復興支援だからといって、すべてを自己負担するというのはおこがましいことだと感じたそうだ。被災地の人々は、地元の音楽活動を少しでも日常に戻そうとしているのだ、と考えるようになったという。 なかにし氏が現地で演奏し、企画をプロデュースし、人と人をつなぐ支援活動のなかで思っていたことは、現地の意向を最優先し、何が求められているかを汲み取る必要性であり、復興支援を自己表現に使ってはならないということであっ

講座の概要	た。ここには「しない自由」もあるべきで、何かしなければならないという強迫観念にかられないことや、人のために行動することだけが正義ではないということ、何もできずに様々な想いを抱えている人もいるということを認識しなければならないと語った。 「日常が非日常と逆転してしまったとき、私たちは音楽の在り方についてもう一度考えなければならない。音楽に何ができるか、今自分に何ができるかについて最善を探し、多様な『音楽の力』について考え続けるしかない。私たちが音楽に携わる限り、考え続けなければならない」と述べて講義を締めくくった。

〈学生のことば〉

・「音楽に何ができるか」という題を春に見てから、この問いについて何度か考えていました。音楽は多くの場合、聴覚という目に見えない領域でしか感じることのできないものです。私はだからこそ価値があると信じています。今回の講義で音楽は、災害を前に無力であると物理的な影響を生み出すことは不可能であるということを聞いた時、衝撃を受けました。そして、以前このようなことについて考えてから、好きなものを否定されたような気になるのが怖くて、目を向けること自体を避けていたことに気がつきました。音楽は時間の演出であるということは、初歩的なことながら、将来音楽に携わることを考えている者にとって忘れてはならないことだと思います。非日常として存在する音楽について、なかにし先生が今回挙げた音楽の在り方とその力を踏まえて、より多角的な視点で捉えられるよう、客観的な意見の吸収を恐れないようにしようと感じました。

（神戸 / 作曲 / １年）

・今回のお話を聞いて、音楽は圧倒的な災害に対して直接できることはないが、人々に寄り添い心を癒し、復興に繋げる力があることを改めて認識できました。想いを届ける活動は、現地にとって何が最善かを考え、自分のできる行動を全力でやることが大切であるということが分かりました。

（神戸 / ヴァイオリン / ４年）

・今回の講座は、音楽が人々に必要とされる状況や音楽を始める際の見極めについて、改めて考えさせられる時間でした。音楽は時間をコントロールする、非日常になるという発想がとてもおもしろかった。災害などで非日常になった世界では、日常を取り戻すための活動が始まると仰っていたが、そこに音楽が組み込まれる瞬間を見極めるのは難しいことだと思った。また、音楽に関して人々の心に寄り添えるものが人の数だけ異なることや、直接の手助けできる力を音楽は持っていないことなど、実際問題が多々あることも、これから生きる上で考えなければならない課題だと思いました。そんな中でも、私たち音楽を届けることができる者がどのように動くか、動かないか、この見極めや選択を大事にしていきたいと思います。

（東京 / フルート / ３年）

・「音楽は時間の進み方をコントロールできて非日常的である」という音楽の捉え方が印象に残りました。ある言葉を音楽にのせて聴くだけで、すごく感動して涙が出たりする理由がはっきりと分からなかったが、非日常的でその空間を言葉では表現できないものだからなのではと感じました。被災地での音楽活動について感動し、改めて音楽はすばらしいものだと感じました。災害が起こってパニックになっている時は、音楽どころではないとなってしまうのは当然のことだが、その後に音楽がまた求められるという気づきには納得しました。音楽を届けられる側である喜びを感じ、それを存分に活かしていきたいと思いました。

（東京 / MLA / １年）

2022 年度　第 7 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 7 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ②： ジュリアード音楽院の学びから世界の演奏活動へ ～お話と演奏」
講　師	濱田 あや（神戸女学院大学音楽学部卒業生）
実施日時	2022 年 9 月 30 日（金）14：00 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部会議室（神戸女学院大学のみの授業）
講座の概要	第 7 回の「ミュージック･コミュニケーション講座」は､｢ようこそ先輩シリーズ」の 2 回目、神戸女学院大学のみの講義として、卒業生の濱田あや氏（M111 回生）を講師に迎えた。 濱田氏は、神戸女学院中高部を経て同大学音楽学部を首席卒業したあと、ジュリアード音楽院古楽演奏科修士課程を第一期生及び特待生として最優秀の成績で修了。プロミュージカ・チェンバー・オーケストラ首席チェンバロ奏者及びサンテスプリ・フランス教会専属奏者である。 今回の講義では、濱田氏が留学で学んだこと、演奏活動している上で重要なことについての話を中心に、経験談を交えてさまざまな話を学生たちに語った。 まずは、大学卒業後に、アメリカにあるジュリアード音楽院に留学した際の話からはじまった。大学院の入学試験では、日本の試験と大きく違うところがある。それは、主専攻の実技テストだけで合否が決まることだ。また、入学試験の成績の結果次第で奨学金を獲得できるかが決まる。アメリカの大学院は授業料が物凄く高いため、試験は大学院に入るにあたって、とても重要なことだったと述べた。 次に、自身の今の演奏活動に結びついている 3 つを紹介した。 1 つ目は実技レッスンだ。音楽院での講義や課題だけでも大変だった中、実技のレッスンでは、毎回新曲を持っていかないといけなかった。練習と勉学の両立は本当に難しかったが､今となっては短時間で曲を仕上げるスキルが身につき､また､たくさんの曲を教わってレパートリーが広がったそうだ。 2 つ目は、オーケストラやアンサンブルのレッスンだ。ピアノ専攻だとオーケストラに参加することが少ないが、チェンバロの場合は「通奏低音」といって即興的に和音を弾いて伴奏するという役割があるため、基本的にオーケストラに参加することが多かった。この授業では、外部からゲスト・コンダクターがきて、年に 10 回ほど演奏会を行った。プロフェッショナルの意識や姿勢を求められ、実践的な経験を積むことができてありがたい経験だったと語る。 3 つ目は、ビジネス知識の授業だ。授業では、資料作成、研究と執筆、セルフ・マーケティング、ネットワーキング、ウェブサイト作成など、さまざまのことを学んだ。演奏家は演奏だけをしていればいい時代ではない。演奏面以外でのビジネス的なスキルを学べたことは、自分が演奏活動をするにあたっていい経験になったし、今でも役に立っていると述べた。 次に､さまざまの国のチェンバロを､写真を交えながら紹介した。濱田氏は「色々な国のチェンバロを弾く機会があったが、その土地や都市で違ったチェンバロを弾くため、大変な面もあった。しかし、それぞれどんな楽器に出会えるのかなどを楽しみながら演奏している。好きなことを仕事にできることは、とても恵まれていることだと思う」と述べた。

講座の概要	濱田氏は、ソロの音楽家は演奏活動の他、アルバム制作をすることが大切だと考えている。今の時代は、簡単にSNSやインターネットで動画を見ることができるため、CDを作成することは難しいのが現状だ。しかし、アルバムを作ることには意味がある。色々な方に視聴してもらい、手にとってもらうことでクラシック界では、デビューした形になるため、アルバムを出さないと何も始まらない。つまりアルバムを作成することは大いに意味があると述べた。 コミュニケーションといえば、言語の問題がある。濱田氏は音楽家にとって多言語を取得することは、メリットがたくさんあるという。例えば、コンサート中にトークをする際、その国の言語で話すことで、お客さんにより身近に感じてもらえ、共感してもらえる。言語と音楽の関わりは大きいため、音楽家にとって言語は重要だと述べた。 濱田氏が専門とする古楽音楽については、実際に学生の前でチェンバロの演奏を交えての紹介となった。 古楽とは、楽譜通りに演奏しないことが基本である。古楽では、自分でアイデアを出し、演奏を付け加え曲を作り上げていくことが重要だそうだ。今回は３曲演奏し、すべて１回目は楽譜通りに演奏、２回目は装飾などを取り入れ変化をつけていた。 【演奏曲目】J. S. バッハ：フランス組曲第５番 サラバンド J-H. ダングルベール：プレリュード D. スカルラッティ：ソナタ イ長調 K.208 濱田氏は「私たちは当時の作曲家が作った楽譜を研究し、どのように演奏されたかなどを考えながら演奏している。自分自身で、自由に作り上げていくことが古楽の魅力の一つだと思う。みなさんも古楽の曲に挑戦してみて欲しい。演奏をする時に何かのヒントになるのではないか」と語った。 至近距離でチェンバロの生演奏を聴くことが初めての学生も多く、大変興味深い時間となったようだった。

〈学生のことば〉

・チェンバロは小学生の頃に一度触ったことがあるのですが、今回、世界的に演奏活動を行っていらっしゃる方の演奏を聴いたことで、チェンバロの音の響きを確かめることができました。また、音楽史などで知識として持っていただけの通奏低音を実際に見て、チェンバロという楽器そのものの特性、あるいは楽曲の時代背景を踏まえた即興演奏に感銘を受けました。非常に興味深かったです。留学などのお話も分かりやすく、様々な古典楽器と市民の接点を垣間見ることができてうれしいです。（作曲／１年）

・言語と音楽は切っても切り離せない存在だということ、耳が痛かったです。本当にその通りだと思います。今までイタリア、ドイツ、フランス歌曲を勉強してきましたが、翻訳に頼ってしまい、ヨーロッパ系の歌詞はキザで自分の中にしっくりくるイメージがありませんでした。洋画を字幕付きで見ていても聞こえてくる英語と字幕の日本語にズレがあるというか「それってそういう解釈なのか？」と思うことが多々あるように、実際翻訳は間違った使い方をされていることがあると仰っていたように原語とのニュアンスの差があるように思いました。演奏が表面的なものにならないために一つ一つの言葉の意味を理解しておく必要があると強く感じました。通奏低音は最近授業で学びましたが、奏者によって自由にアレンジをする「自由」とは、作曲者の背景や曲の時代背景、研究者の文献など様々な下準備をした上で成り立つものだと演奏を聞いて思いました。自由だからこそ、作曲者の曲への思いを崩さないように演奏する責任の重さが求められると感じました。（声楽／３年）

2022 年度　第 8 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 8 回ミュージック・コミュニケーション講座 「簡単なコードで曲を弾いてみよう～ポップスの演奏法から学べる体の動き・アレンジ～」
講　師	鈴木 潤（ピアニスト、作曲家）
実施日時	2022 年 10 月 7 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	鈴木潤氏は、ピアニスト、キーボーディスト、作曲・編曲家として活動し、完全放置型の即興音楽ワークショップ「音の砂場」をはじめとした様々なワークショップ活動を展開している。数年にわたり講義をしていただいているが、今回の講義内容は、ポップスやジャズの演奏法に基づいてコードを理解し、実際に曲を演奏してみるというワークショップ形式のものであった。 講義の冒頭では、鈴木氏が自身のワークショップや音楽活動での経験から、ワークショップは単なる福祉活動ではなく、演奏活動と通じる点も多いと話された。また、ワークショップを行う際に一番重要な点は準備であり、使用する楽器の音量に注意を払うことが大切であると指摘された。 続いてコードの実践に移った。まず各々が好きな音を５つ選び、順番に鳴らして響きを聴く「５つの音のコラール」というアクティビティを行った。次にドレミソラの中で順番を各々選んで弾いてもらった。このアクティビティでは、指揮者の個性によっても音楽が変わっていく様子もおもしろかった。コードというと三和音を思い浮かべるが、音が同時に鳴っていればコードであり、先に行ったドレミソラから音を選んでランダムに並べる方が、コードの生まれる元に近いと語った。 次に三和音に番号（C major は 1 番、D minor は 2 番というように）をつけ、コードを演奏する方法を学んだ。この方法では、手の形を変えず、同じ手の形のまま横にスライドだけでコードを押さえることができるため、どの学生も簡単にコードを演奏することができた。そして 1 、5 、6 、3…といった番号を見てパッヘルベルの≪カノン≫を合奏した。この≪カノン≫のコードは、様々な楽曲に使われており、身近な音楽も同じコードの進行でできているものが多い。番号でコードを覚えることにより、曲のコードが伝えやすく、覚えやすくなり、また移調も容易になることを学んだ。 ピアノの構造についての解説では、ピアノの鍵盤は奥が均等であり、また鍵盤をフルに押しても約 1cm しか下がらず、音が出るのは一番下まで鍵盤を押した時ではない。そのため音が出てから止まるまでは約 3㎜の幅しかないということが指摘された。このようなピアノの構造をふまえて、即興演奏の習得に役立つ、指を横に滑らせて、触覚を使いピアノを撫でるようにコードを弾く練習法が紹介された。指を滑らせる奏法は、クラシック音楽ではあまり好ましくないとされているが、ジャズやポップス音楽は日常会話であるため、指を滑らせて自分の行きたいところを探す奏法が使われている。 次のステップとして、メジャーコード、マイナーコード、分数コード、四和音を学び、≪ Pretender ≫を合奏した。また、コードには様々な応用があり、演奏者によっても好みの和音、流行りの押さえ方があることを知った。 まとめのお話として鈴木氏は、ジャズやポップスのような口語的な演奏では、

講座の概要	会話をするように、人と一緒に遊びながら音を探ることが大切であると述べられた。日々クラシック音楽を学ぶ学生にとって刺激的な講義であった。

〈学生のことば〉

・今回の授業はまず、どんな和音も弾き方次第では綺麗に聞こえるということが驚きだった。ついつい二度の響きがあると汚いのではないかと思ってしまったり、Ｖの和音の後はＩの和音というように、和声を気にしてしまったりしていたが、もっと自由に伴奏を考えてもいいと思えたのも大きな発見だった。また、先生が隣にいる人に聴かせるなら大きな音を弾く必要はないと仰ったことも大変な気づきになった。今まで、さりげなく弾いてしまってはメロディラインが聞こえなくなり、意志のある旋律にならないと思い込んでいましたが、時には気軽な音色があってもいいのかもと、クラシックを弾く上でも新たな考えを身につけることができた。　（東京／ピアノ／４年）

・「鍵盤の上で手を滑らせる」ようにして響きを探すという仕方が、これまで楽譜の音を読みその音を目掛けて音を出していた自身の考えに対して新しく、自由な感覚を与えられた気がした。気合を入れてではなく、何気なく自由にピアノと触れ合うことで自分と楽器の距離を縮めてくれるのだと知り、自分もジャズ奏者などのように楽器と仲良くなれるよう、今後そのようなアプローチの仕方もしていきたいと思った。

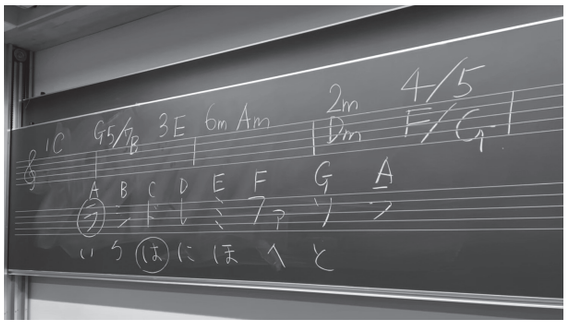
（東京／ピアノ／４年）

・今回の授業を受けて、コードについては音楽文化教育専攻の授業で知識としては知っていましたが、実際に同じコードの循環で作られている曲がたくさんあるということに驚いた。そのような曲を他にも探してみたいと思います。また、コードを数字で表す場合もあり、それをプロの人たちが実際に使っていることを知り驚いた。数字で表すことでわかりやすく、音楽を専門としてない人にとっても敷居が低くなるので、学校などで教えると良いのではと思った。私は即興をこの講座以外にやったことがないため、即興で曲を作ることが全然できないが、今回、ＣとＧとＦのコードが基本になっているということを聞き、思っていたより気軽に伴奏づけに挑戦できる気がした。ピアノで遊ぶ感覚でやってみようと思う。

（東京／音楽文化教育／３年）

・コードについて丁寧に噛み砕いて説明してくださって、もっと踏み込んで学びたいと思わされる楽しい授業だった。四つの音を好きに配置し、複数人で同時に鳴らすと１人の作曲家では生まれない和音ができるというお話や、「音楽は日常会話みたいなもの」とおっしゃったことが特に印象的でした。どのようなジャンルであれ、音楽は楽しむものであることを忘れずに、今後の音楽学部生活を過ごそうと感じた。　（神戸／MC／１年）

・たった五つの音を繰り返し演奏する体験が新鮮だった。先生が音の縛りを決めてくださった時と、決められない範囲でした時とで音の雰囲気も全く異なり、無秩序に抽出した音の時は不協和音になりがちで、でもその不協和音も心地よく、一人でいたらできない音型が出来上がっておもしろかった。　（神戸／ピアノ／１年）



※写真は東京音楽大学での様子です。

2022 年度　第 9 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 9 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ③：音楽づくりワークショップ研修」
講　師	東 瑛子（神戸女学院大学音楽学部卒業生）
実施日時	2022 年 10 月 28 日（金）14：00 ～ 15：30、11 月 4 日（金）14：00 ～ 15：30 12 月 2 日（金）14：00 ～ 15：30、12 月 9 日（金）14：00 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部会議室（神戸女学院大学のみの授業）
講座の概要	第 9 回「ミュージック・コミュニケーション講座」は、「ようこそ先輩シリーズ」の第 3 回として、神戸女学院大学卒業生の東瑛子氏 (M125 回生）を講師に迎えた。 東氏は神戸女学院大学音楽学部、同大学院音楽研究科修了、並びに英国ギルドホール音楽演劇学校修士課程リーダーシップ専攻修了。アウトリーチ活動やコラボレーションに加え、音楽作り、リトミック、即興を用いた音楽プログラムを研究、実践している。 今回の講座は、10 月 28 日、11 月 4 日、12 月 2 日、12 月 9 日の全 4 回にわたり開催された。 【1 日目】 ●アイスブレイク 参加者で円になり、東氏の後に続いて真似をし、手や足、全身を使って声を出しながら体をほぐした。次に部屋の中を自由に歩き周り、目があった人とアイコンタクトをとったり、講師が出した①アップ、②ダウン、③クラップ、④スタンプという合図に合わせてアクションを取るなどが行われた。学生は積極的に行動し、周りの動きをよく見ながら実践していた。 ●コール・アンド・レスポンス 足でリズムを取りながら、自分または相手の名前を呼びながらコール・アンド・レスポンスを行った。「声の強弱などを意識するように、そしてこれを音楽的に考えて実践してみて欲しい」と指示があった。東氏は「どうしたら変化がつくのか、どうしたら伝わるのか。相手に伝えるときに私たちは、知らないうちに全身を使ってやっていることがこのワークショップでは実感することができる」と言葉を添えた。 ●インプロビゼーション (音楽創作) 参加者は用意された様々な楽器から好きなものを選び、東氏の合図に合わせて音を鳴らしたり止めたりを行った。その後、 2 つのグループに分かれて音楽創作が行われた。「音色や音がそれぞれ違うが、どうしたら活かせるかなどをよく考えて実践してみてほしい」という言葉に試行錯誤している様子だった。 5 分ほどのグループワークをしたのち、それぞれ発表を行った。グループの演奏を聴いて気づいたことを発表し、楽器の重なりや、音色についてなど、参加者同士が分析しあっていた。 東氏は「ワークショップとは、座学ではない。自分ひとりでするのではなく、想像のプロセスがあり、実際に動く。先生と生徒でなく、両者がフラットな関係でできることだ」と述べ、最後に「今日やったことの中で、何が楽しくて、何が次に活かせるかをひとつだけ選んでおいて欲しい」と述べて講座を締めくくった。

講座の概要	【２日目】 ●アイスブレイク 　１日目同様、自己紹介を兼ねたコール・アンド・レスポンスや、円になった拍手やジャンプをリレーのように回していくアイスブレイクなどをした後、「カルガモの親子ゲーム」を行った。このゲームでは、ペアになって、片方が目を閉じ、もう片方がその手を引いて部屋の中を歩き回るといったものだ。慣れてきたら、手を引くのではなく、指１本のみ繋がった状態で部屋を周回する。これは「相手を信頼する」ということに重きを置いたものであると説明があった。 ●ボディ・パーカッション 　次に全員で円になり、身体を楽器に見立てて足踏みをしたり、太ももを叩いて鳴らして、リズムの演奏を行った。途中から円を２分割やペアになるようにして、グループごとに異なったリズムを演奏し、リズムセッションを行った。また、「スイッチ」の掛け声を合図に別のグループのリズムを演奏するなどもした。 ●インプロビゼーション 　先ほどのボディ・パーカッションで使用したリズムを、今度はペアに分かれて、それぞれのリズムを楽器を使って再現した。各ペアには「さっきのリズムを、ペアで分担しても良いので、楽に演奏できるように相談、工夫してみよう」という課題が与えられ、ペアでのグループワークの時間があった。そして最後に、完成したリズムを披露し合った。 【３日目】 ●アイスブレイク 　この日のアイスブレイクでは、「バナナ」という単語だけを使って会話をするというゲームから始まった。３回目ということもあり、参加者同士の壁も少なくなっていたことも相まって大盛り上がりの様子をみせた。 ●インプロビゼーション 　２日目に組んだペアで、再度作ったリズムを復習した後、さらにそれらのリズムをアレンジするグループワークを行った。グループごとに拍子感を変えてみたり、楽器の演奏法を変えたり、コードやオブリガードを付け足すなど様々な工夫を凝らしていた。舞踊の学生は、民族風のステップを振付して加えている姿が印象的だった。 　グループワークでそれぞれのリズムのアレンジが完成した後は、互いに披露しあい、東氏は作り手側の狙いと聴いた（あるいは見た）ときの印象、つまり主観や客観の重要性について述べた。 　最後に、東氏からイスラエルの子どもたちが歌う歌の紹介があった。日本のわらべうたのような、簡単なメロディからなる２部構成の曲を全員で繰り返し歌って覚えたところでこの日は終了した。 【４日目】 ●アイスブレイク 　「クレイジーオペラシンガーゲーム」というゲーム性の高いアイスブレイクを行った。これは、５人で行うゲームで、ひとりが真ん中に立ち、周りに立つ４人の真似やリアクションを同時に行うといったものだ。正面に立った人は簡単な動きをし、後ろに立った人は簡単な旋律を歌う。この２人の真似をしながら、左の人からのパーソナルな質問（好きな色は？など）と、右の人からの簡単な算数の計算に答えていく。

講座の概要	様々な情報を同時に処理する能力が試されるこのゲームでは、大いに盛り上がっている様子が見られた。 ●インプロビゼーション ペアになり、３日目で歌ったイスラエルの歌を用いた創作を行った。 元の調は変えないというルールのもと、ハモリパートや対旋律の創作、拍子を変えるなど、踊りを創作して踊りながら楽器で演奏するなどの工夫が見られた。 最後に、それぞれのペアで出来上がったものを発表しあって共有し、さらに一緒に演奏したり、ペア同士の作品を組み合わせて演奏するなどをして終了した。 今回の全４回にわたるワークショップにおいて、学生からは「次第に羞恥心がなくなった。なんでもやってみようという気持ちになれた」「自分からアクションを起こしても受け入れてもらえる環境が良かった」「年齢、立場に関係なく一緒になって音楽をつくる楽しさを感じられた」といった声が挙がった。

〈学生のことば〉

・一回目と比べて回を重ねていくうちに全員の顔の表情が和らいでいき自分の個性を思いきり出せている様子が動画から見てわかりました。同じワークショップの授業でも毎回違うものができるので飽きずに楽しめました。上下関係なく同じ立場で取り組めるのが魅力的でした。この授業でワークショップを初めて学ぶことができて、音楽の捉え方の視野が広がりました。

（ヴァイオリン／４年）

・全４回の授業を通して本当に羞恥心がなくなりました。この大学に編入した最初の時期は、特に人と触れ合うことが苦手で、大勢の学生が集まる大講義で体調を崩したり、電車に乗ったら気分が悪くなって途中下車するなどが日常茶飯事だったので、本当は歌以外にもダンスとかお芝居とか勉強したいことがありましたが、人と一緒にやらないといけないことが怖すぎて半分以上諦めかけていました。でも、最近は人に対する恐怖心というものがほとんどなくなってきました。慣れてきたということもあるでしょうが、人と繋がること、話しやすい印象を持ってもらえるようにするためのノンヴァーバルコミュニケーションのやり方を少しずつ無意識にやっているのかもしれないなと思います。今回大きなテーマとして東先生が設定していらした「人と触れ合う」ということからも、このワークショップを通じて自分自身も少しずつではありますが理想の自分へ変わっていくことができるのかなと思います。（声楽／３年）

・人と一緒に何かを作るという体験は、のちの創作活動に少なからず影響を与えるものだと思います。どの回も東先生は途中段階であっても見せ合うことを大切にしていらっしゃって、普段の生活では意外と完成したものだけを鑑賞していたのかもしれないと考えさせられました。普段の何気ない悩み事を相談することの重要性は、音楽的な創作にも繋がることなのでしょうか。今回の経験を、今後の制作における過程に繋げたいです。

（作曲／１年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2022 年度　第 10 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 10 回ミュージック・コミュニケーション講座 「アートが共生社会の基礎をつくる～インクルーシブアートワークショップの試み～」
講　師	茂木 一司（跡見学園女子大学教授）
実施日時	2022 年 12 月 16 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	茂木一司氏は跡見学園女子大学の教授であり、インクルーシブ美術教育学、ワークショップ学習を専門に研究されている。今回は美術によるワークショップの現状を中心に、アートがインクルーシブな活動に繋がる可能性についてお話いただいた。 茂木氏は「アートをどう捉えて社会に拓いていくのか？」を考えたときに、一般的にアートは自由が多い個人活動である反面、社会は規範や協働の中で動いているという相違があるという視点から講義を始められた。アートの世界を社会に理解してもらうためにはどうしたら良いかを考えていたが、「わかり合えないことをわかり合う」ことこそが多様性のツールに繋がるという気づきがきっかけとなり、アートワークショップの活動を始められたとのこと。また、活動を始めた 2003 年頃に苅宿俊文氏、上田信行氏をはじめとする楽しい学びを一緒につくれる仲間に出会えたことも茂木氏がアートワークショップを実施する活力になっているそうだ。 次にこれまでの活動として、障害児とつくるメディアアートワークショップ、盲学校と聾学校の共同で実施した身体的なワークショップ、知的障害者との音遊びの会、養護老人ホームでの和太鼓のワークショップなど様々な対象の方とのワークショップを、映像も交えて紹介された。ワークショップは実施している大人が何かを与えるのではなく、参加者たちの反応によって物事が進んでいくことが良い所だと述べられた。 続けて茂木氏は多様性が重要視されている現代の社会で、コミュニケーションのスキルをあげていくことは必要不可欠であるとし、自分の意見を伝えて、相手の考えを聞くことがしっかりできる人材を育てていくべきだと述べた。アートはもともと見えないもの（想いやコンセプト）を見えるように表現することである。アート教育を通して見えたことだけで分かったと思い込んでしまうのではなく、無意識の世界を耕し価値観を揺さぶること、自分の感じたことを伝え、相手の価値観にも触れる経験をすることが、コミュニケーション能力を育むと語られた。アートの形が個人の作品（モノ）だけでなくワークショップを通してみんなで作り上げる空間なども作品と言われるようになってきたことへも大きな可能性を感じられているとのこと。 アートがもともと「見えないもの」なのであれば、目が見える・見えないは関係の無いことなのではないかという考えのもと、茂木氏は視覚障がい者とのアート活動にも力を入れている。学生たちは数々のインクルーシブなアート活動の例を示され、アートを捉える枠が広がったのではないだろうか。最後の質疑応答では様々なキーワードが挙がり、茂木氏の講義からアートとは何かを考える強いメッセージを受け止めたことが感じられた。

〈学生のことば〉

・「わかり合えないことをわかりあう」ことは「多様性を理解する」とおっしゃっていたように、これは今求められている共生社会やこれからの社会を生きていく上でのまさに根本であると感じた。また、そうだからこそ今の教育現場で必要とされ、グループ学習や体験学習が取り入れられているように思った。（東京 / 音楽文化教育 / ３年）

・芸術はモノではなくコンセプト・考え方が大切であるという言葉は、私自身の考え方がとても変わる言葉でした。何かしらの障害を持つ方々にとっては、芸術がモノであった場合、学ぶ必要があるのか、という言葉がよく使われ、その言葉自体が差別になることがあります。芸術がコンセプトであるならば、すべての障害を持つ方々に差別なく必要なものとして扱われると感じました。芸術は誰しもが学び感じ、考えるために必要なものであり、自分の自由な意思で生きていける時代、その自分の内側の気持ちを表現できるのがアートであると思います。音楽も同じく、自分の気持ちを音に表現できることが魅力であると考えます。私たちは、音楽について学んでいる以上、すべての人に分け隔てなく、芸術について、音楽について、様々な形で伝えていく必要があると思いました。そのためにも、自分自身、思ったことをきちんと相手に伝え、専門性の信頼を身につけるべく、このミュージック・コミュニケーション講座で行うワークショップなどの授業が肝になることを、今回の講義で身に染みて感じました。

（東京 / ピアノ / ３年）

・「アートの本当の意味は、正しい正しくないの価値観を揺さぶること」という言葉がとても印象的でした。アートだけでなく音楽でも、「正しい音楽」として型にはまっているものだけがおもしろいわけではないし、いろんなものがあっていいなと思えるのが芸術の楽しさかなと思いました。

（東京 / MLA / １年）

・「アート」を「アート」という括りの中だけに収めないことが重要だと思いました。音楽も同様に「音楽」という縛りの中に囚われず、音楽は言葉が通じなくてもどんな人とでも楽しめる一つのツールと考えて、これから出会う人たち、言葉のコミュニケーションが困難な人たちとの繋がりのきっかけになるものを作れるように、大学で学び得たものを活用していきたいです。障害を持っている人たちの話がありましたが、音楽を耳で聴いて楽しむものに留めたくないです。聴覚障害のある人も楽しめるような視覚的、触覚的方向からアプローチするような音楽というものを発展させていけるようになりたいです。

（神戸 / 声楽 / ３年）

・アートを社会の中にどう拓いていくかというテーマにおいて、アートと社会を分けて考えてしまうと、授業にも出てきたようにアートは自由で個人を重んじるもの、社会は規範的で協調性を重んじるものといったイメージが強く、それらを一緒の枠組みにしようとするのは難しいと思います。私だったら全世界共通の人が生きる上で欠かせない「衣食住」などの、誰にでも身近なところにテーマを置くと思います。そうすることでアートは社会に入っていきやすくなる気がします。一つ例を挙げるなら、日本の主食であるお米を使って海外のアニメのキャラクター弁当を作るとか（キャラ弁はある意味アートな気がする）海外の人と日本の人が一緒に行えるようなワークショップを行うことにより、言葉の壁や文化の壁を乗り越えた関係をつくるきっかけになったり、他国に自国の文化を伝えるきっかけになったり、違う国で育っていても同じようなところもあるということを見つけるきっかけになって欲しいです。

（神戸 / 声楽 / ３年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2022 年度　第 11 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 11 回ミュージック・コミュニケーション講座 「学校で教えてくれない音楽」
講　師	大友 良英（作曲家）
実施日時	2023 年 1 月 13 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	第 11 回目の講座は、映画やテレビ音楽の作曲家、ギタリスト、様々なプロジェクトのプロデューサーとして多方面にわたって活動されている大友良英氏を昨年に引き続きお迎えし、「学校で教えてくれない音楽」というテーマで講義いただいた。 はじめに、ご自身が影響を受けたというノイズミュージックや、ジャズ（マイルス・デイヴィス）の CD を聴いた。大友氏は何の楽器が演奏しているのかを学生に質問したが、学生たちはクラシック音楽でない演奏の楽器編成を明確に答えられず苦戦していた。大友氏は、自分の専門とするジャンル以外でもどういった楽器で音楽が成り立っているのか、どのように録音されているのかなどを分かることが、プロデューサーや教育者として活動するには重要であることを述べた。また、ピアノやオーケストラで使用される楽器は民族楽器とは呼ばないが、三味線は日本では民族楽器と呼ばないが海外では民族楽器という呼ばれることを例に挙げ、民族楽器の捉え方は国力の有無が関係していると指摘した。さらに、音楽は専門家だけのものではないこと、西洋音楽が音楽の基本ではないことなど、具体的な例を示しながら話された。 授業の後半は、各学生が自分の専攻楽器または小物楽器等を持ち寄り、即興音楽のワークショップをおこなった。第一段階として、大友氏のハンドサインによって、強弱や音の長さを変化させるだけのアンサンブル、続いて、ある音形パターンをベースとして、多様なハンドサインによる即興的なアンサンブルを体験した。このような即興アンサンブルのファシリテートをする際の手法として、その場にある楽器で瞬時にどれだけバリエーションがつくれるかを考えること、面白い構成をしていくことなどを挙げていた。 最後に、大友氏が 2005 年から活動を続けている知的な障害のある人を含むアーティストたちの音楽ワークショップ活動である「音遊びの会」や、東日本大震災を受けて 2011 年より「フェスティバル FUKUSHIMA!」について映像を交えながら紹介された。これらの活動で創られる音楽は、プロの演奏家と障害者やアマチュア音楽家が共に演奏するものであるが、大友氏は即興ワークショップでは完成系を目指すものではなく、出てきたものの中で何か最上なのかを考えることが重要であり、その場に参加している人たちで何ができるのか、どうやって面白いことができるのかを常に考えていると語った。 即興音楽のワークショップをおこなう際の様々な考え方や手法を提示していただき、ワークショップのみならず音楽そのものに対する視座を高めることができた講義であった。

〈学生のことば〉

・今回の授業を受けて思ったことは、音楽は「音を楽しむ」ことで、決して楽器を演奏したり、曲を奏でることがすべてではないということである。さらに、障がい者や復興支援の場でのコンサートの様子を見て、つい最近卒業試験を終えて、「上手に弾けなかったらどうしよう」とか、「点数が低かったらどうしよう」といった音楽との向き合い方は、今後社会にでた時にさほど求められているものではないことに気づいた。

（東京 / ピアノ / 4 年）

・ワークショップを通したコミュニケーションの在り方や、人と人が繋がり合う楽しさを学ぶことができた。有名な曲が世に出るまでの秘話や工夫のお話がとても貴重で、活き活きとこだわりを持って音楽をすることが大切で、その気持ちが巡り巡って誰かの心を動かすことができるのだろうと実感した。（東京 / ピアノ / 4 年）

・ノイズミュージックというのは初めて聞いたので正直あまり理解できず良いところが分からなかったが、先生が仰っていたように自分が専門とするジャンル以外の音楽についても幅広く知識を身に付けることは、自分の活躍ができる場を広める意味でもとても大切で意味のあることだと思った。学校で学ぶ音楽がクラシックなので、それが全ての基本で中心のように思えてしまうが、全ての音楽がそれだけで成り立っているのではないのだと改めて感じた。色々な音楽に触れ、学びを深めたい。（東京 / ピアノ / 3 年）

・ノイズミュージックから始まる講義は非常におもしろく、聞き手を話に引き込む力を感じた。教職課程をとっている生徒が多いなか、「好きなものしか教えられない」教師にならないようにと話していらっしゃったのが印象に残った。また、好き・嫌いと良い・悪いはどのような場面においても区別すべきだが、それらの範疇とは別に全く異なる音楽が存在するという事実を認識することが重要だということを再確認できた。音楽における無意識での差別（民族音楽）、「じゃんけん」という身近な音楽、プロ同士の間に成立する音楽の信頼関係についてなど興味深いお話を多く伺えた今回の講義は大変良い経験となった。

（神戸 / MC / 1 年）

・今まで何気なく音楽を楽しむために聴いていたが、今回の授業を通して、その音楽がどうやって録音されてどういう楽器編成で構成されているのかなど、曲のバックステージが気になった。学校では J-POPS の奏法というものは習わなかったし、自分が特に身近に感じるジャンルなのに、普段聞く曲の裏側って本当に何も知らないのだなと痛感した授業だった。

（神戸 / 声楽 / 3 年）

・音楽と舞踊は共通していることが多いが、舞踊で、みんなで踊ってみよう！というようなイベントや舞台は音楽よりも少ないと思った。踊りも誰でも何人でも踊れるが、音楽より参加しにくいイメージが少しはあるからかなと思う。もう少し気軽に参加できる踊りについて考えるのもよいなと思った。（神戸 / 舞踊 / 4 年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2022 年度　第 12 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 12 回ミュージック・コミュニケーション講座 総括
実施日時	2023 年 1 月 20 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	1 年間の学びの振り返りとして、両校で総括をおこなった。それぞれの大学の学生が取り組んだ活動のなかから、代表的なものを紹介した。 はじめに、東京音大の学生 3 名が、3 日間の夏期特別セミナーについて報告をおこなった（内容については p.29 ～ 31 参照）。最終日に実施した小学生対象のワークショップ「音の展覧会」の内容を中心に、本番に向けた準備、英国との Zoom によるオンラインレクチャーなどの内容を紹介した。写真やワークショップのために創った歌と踊りの実演を披露しながら、活動の様子を説明した。また、「レッスンやコンクールといったいわゆる音大生の活動とは異なり、音楽のジャンルや年齢の枠を超える形でワークショップをおこなったことにより、音楽の真髄に触れることができた」という感想が述べられた。 次に、神戸女学院の学生より「音楽作りワークショップ研修」の報告があった（内容については p.20 ～ 22 参照）。研修で実施した様々なアイスブレイクを紹介した。東京音大の学生も実際に「バナナマンゴーゲーム」を体験してみたところ、大いに盛り上がった。続いて、楽器を使ったワークについての紹介があり、複数回のワークを通じてモチーフが生まれて発展していく様子を、動画を使いながら説明した。「一人一人が自分の感性でアイディアを出し共有することで、音楽には色々な解釈があり、正解はないことを実感した」という感想が述べられた。 最後に、まとめとして「ワークショップの活動を今後どういう形でやってみたいか、またそれに対してどのような障壁があるか」ということについて、意見交換が行われた。東京音大からは、「今後、ワークショップなどの活動を続けていきたいがどのように生計を立てればよいのか分からない」という意見が主な声として挙がった。仲間やネットワークを見つけ、コネクションを作っていくことが大切であること、謝礼についても、弱気にならずしっかりと交渉することが大事であることが助言された。一方、神戸女学院からは、「無名の状態で、どのように自分を売り込み、知名度を上げていくのか」という声が挙がった。誰もが最初は無名であり、それでも積極的に名刺を配り、誠実な活動を通してしっかりと自己宣伝を行うことが大切であると、すでに活動を開始している助手より励ましの言葉があった。両大学の学生で今後の活動を当事者意識をもって考え、課題を共有する時間となった。

〈学生のことば〉

・プレゼンテーションでは、人により深く分かりやすく説明するために大切なことを先生からも教えていただきました。またプレゼンテーションを作る段階から様々な先輩の協力があったからこそ、ここまでの完成度のプレゼンテーションができました。（東京 / MLA / 1 年）

・神戸女学院のプレゼンは、東京音楽大学と活動内容が異なっていて、知らないこと知るきっかけにもなり勉強になりました。口頭では伝わりにくい説明を、実際に皆さんでやり方を見せてくださり、とても参考になりました。東京音楽大学のプレゼンでは、ワークショップをリードする役目を

実際に体験して、楽しかったことや大変だったこと、工夫したことなどを丁寧にわかりやすく説明してくださり、発表を聞いて、得ることが多くありました。発表の仕方やパワーポイントの作り方でも勉強になる部分が多々ありました。

（東京 / ヴァイオリン / ３年）

・ワークショップ実施報告の準備を進めていく過程で、メンバーそれぞれの音楽に対する考え方や捉え方の意見を知ることができ自分の視野が広がりました。将来音楽活動をしていく上で知名度や金銭面など様々な課題がありますが、自分に何ができるのかを考え、社会に貢献できる活動をしていきたいと思いました。

（神戸 / ヴァイオリン / ４年）

・お互いのプレゼン発表を聞いて東京音大のワークショップとも幾つか共通点があって、ワークショップも絶対に一つひとつ違うものを考えないといけない訳ではなくて、同じような内容があっても主催者や参加者の個性が出て、一つひとつが違うものになっていくのだなと感じました。卒業後に活動するにあたってどのようにしていくか、同じように悩んでいる人は東京音大にもたくさんいて、今後お互いが協力しながら活動できる場所づくりを関東と関西で広げていけるように私も努力していきたいです。　（神戸 / 声楽 / ３年）

※写真は両大学での様子です。

2022 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」夏期特別セミナー

講座の名称	ミュージック・コミュニケーション講座 「夏期特別セミナー」ならびに音楽作りワークショップ「音の展覧会」
講　師	デッタ・ダンフォード、ナターシャ・ジエラジンスキ（英国）
実施日時	2022 年 9 月 18 日（日）～ 20 日（火）
実施場所	東京音楽大学 池袋キャンパス A 地下 100（9/18 ～ 9/20） 区民ひろば南池袋（9/20 のみ）
講座の概要	例年、夏期に海外から講師を招聘し音楽作りワークショップのセミナーを実施してきたが、昨年と一昨年度は新型コロナウイルスの影響により中止を余儀なくされた。今年度は 2 年ぶりに特別セミナーの実施を計画して準備を進めていたが、諸事情により結局英国から講師の来日が不可能となった。そこで東京音楽大学では、科目担当教員と助手による指導で音楽づくりを行い、加えて英国の講師にオンラインでレクチャーをしていただくという形で 3 日間の特別セミナーを実施した。また 3 日目には子どもたちを対象とした音楽作りワークショップをおこなった。参加者は東京音大の MC 講座履修生に加え、卒業生等およそ 10 名であった。 1 日目のセッション①は、アイスブレイクとして、自他紹介、リズム回し、コール＆レスポンス、連想ゲーム等を行い、音楽に合わせて自由に歩き回りながら身体も動かした。続いて、武石教授よりワークショップの概念や特徴、音楽におけるワークショップ要素の活用や実践の場などについて講義があった。次に、さまざまな楽器を道のように並べ、1 つずつマレットで叩きながら歩いていく「楽器リレー」を体験した。 午後のセッション②は、グループに分かれて絵画（ピカソ、ルソー、シニャック、東山魁夷の作品）から曲を創作するワークショップをおこなった。絵から読みとれる情景、感情、時間などを音でどのように表現するか話し合い、実際に曲として形にした。各グループが創作作品の演奏をおこない、他グループの参加者からどの部分をどの楽器で表現していると思ったかなど、意見交換をした。このワークは、3 日目に予定している子どもたちを対象としたワークショップのメインの活動であるため、どのように子どもからアイデアを引き出すとよいかといった手法も検討しながら進めた。 その後、ロンドンの講師 2 名と Zoom で繋ぎ、デッタとナターシャによるオンライン講義がおこなわれた。はじめに、両講師がかかわっている活動やプロジェクトについて、映像を交えながら紹介された。ワークショップの対象や年齢層が幅広く、社会包摂とも密接に関連した活動が多いのが印象的であった。英国での先進的な活動状況を知ることができただけでなく、様々な対象者（乳児をもつシングルマザー、障がい者、異なる文化背景をもつ人など）に対して、音楽（時には音楽以外の要素も）を通じてどのようにワークショップを展開するかといったアプローチの方法や、英国における様々な社会問題を解決するために我々アーティストがどこに働きかけるべきか等、ワークショップリーダーとしてのあり方について示唆に富む内容であった。また、「Philosophy of practice」についてのお話をいただき、他者との対話や協調性、多様性を受け入れる包容力など、ワークショップにおける重要な考え方を伝えていただいた。

講座の概要	最後に、オンラインでできるいくつかのアイスブレイク・ゲームを実践した。講師から出されるテーマ（りんご、赤いブロック、赤い布、赤いペン）に対して学生が２人１組でジェスチャーを考え、他の人にどのテーマをを表現しているか当ててもらうという簡単なワークである。オンラインの画面越しであるからこそ、相手に伝えようとする力や、読み取ろうとする力が大きく働き、またお互いの信頼関係からあるからこそワークショップが成り立つ、ということを体感した。 ２日目は､3 日目に行う小学生対象のワークショップ｢音の展覧会｣の準備として、全体の流れ、アイスブレイクの内容、メインの活動である絵画から曲を創作する活動の段取りや役割分担等を検討した。午前のセッション③は、前日の①と同様にアイスブレイクからスタートしたが、この日は学生たちがリーダーとなってリーディングの練習をした。また、メインの活動で使用するオリジナルの歌と踊りを考案し、子どもたちへの教え方についても検討した。 この日も、英国と Zoom でつなぎ、オンラインレクチャーをおこなった。はじめに学生たちが子どもたちとのワークショップの計画内容を紹介した。特に、アイスブレイク（拍手回し、名前とジェスチャー、1,2,3,4 ゲーム）と歌と踊りを教えるワークは実演しながら説明し、デッタとナターシャからアドバイスをいただいた。講師の２人からは「指示がわかりやすく、表情もよいので、指示の言葉が日本語であっても内容が理解できた。参加者からアイデアを募集する方法もよい」と評価してもらい、「アイスブレイクで声を使ったものを取り入れると、参加者のレベル（音程、音域、音量など）を把握できるので、歌のワークの時に役立つ」といったアドバイスや、歌と踊りを教える際の段取りについて指摘をいただいた。 その後、質疑応答の時間を設けた。「子ども（6~7歳）を対象とする際に気を付けることは何か」という質問に対しては、「特定の年齢に気を付けるのではなく、それぞれの子どもの様子をよく見ることが重要。どの子が助けを必要としているのか、何かアイデアを言おうとしているのかなど、気づいて対応できるとよい。低年齢の子どもには、言葉での説明よりも動きで示す方が効果的である（言葉が少ない方が動きに注目してもらえる)、強いて言えば、6~7 歳の子どもは集中力が長く続かず、疲れやすいということがあるので、アイスブレイクの後に歌を教える際に、一度座って、歌を聴いてもらうとよい」といった翌日のワークショップもふまえた回答を得られた。また、「歌を教える時に、自分が内容を忘れたり間違えたりしてしまう。講師の方々は、どれくらい練習（準備）しているのか」という質問に対しては、「私たちも間違えることはある。そんな時は素直に間違えた！と言ってやり直せばよい。ピアノや他の楽器でメロディーラインをサポートしてもらうと、次のフレーズを思い出すことができる。チームで取り組む利点を活かすとよい」というアドバイスをいただいた。さらに、きっちりと進行していくことよりも、誰一人として置いて行かれることなく全員が参加しているという「場づくり」が重要であり、ワークショップでは予測できないことが起こるので、その場に応じた「柔軟性」が必要であると指摘された。 オンラインレクチャーの後半は、講師から「２つのモデルからみたワークショップの音楽作りについて」「４つの “Listen” について」をテーマに講義をいただいた。前者のトピックでは、ワークショップにおいては、参加者が皆で同じことを揃ってやる音楽作りだけでなく、個々の異なる要素を合わせることで音楽を創作することの重要性が強調された。後者のトピックでは、「Listen」に関連する次の４つの視点についてお話いただいた。１つ目は「ワークショップの現場で個々の参加

講座の概要	者がどのような音を奏でているのか実際の音を聴くこと」、2つ目は「自分の心の声を聴く（自分が現在どういった心境なのか客観的に分析する）こと」、3つ目は「他のリーダーや参加者がどのような様子か、何か起こっているのかを気にかけながら、それに対して何かできるかを考えること」、4つ目は「ワークショップ全体を通して、どこまで達成できて残り時間で何をすべきかなど、全体的を把握すること」である。これら4つのListenのどれかに偏ることなく、バランスよくやっていく必要があることも示された。これらの考え方を含め、2日間にわたるレクチャーは、ワークショップ本番に向けて大変有益であり、学生たちの励みになったようだ。 セミナーの最終日である3日目は、ワークショップに向けて入念に準備した後、大学に隣接する区民ひろば南池袋に移動して本番をおこなった。参加した子どもたちは、小学1～2年生を中心とする15名であった。子どもたちは、初対面の音大生たちや様々な楽器を目の前にして緊張気味で、テンションが高くなる場面もあったが、アイスブレイクで楽しく和やかな雰囲気となり、音楽作りも概ね順調に進行することができた。デッタとナターシャによる講義内容、アドバイス、そしてこれまでの授業での経験も活かされたようだ。学生たちはそれぞれの役割を果たしつつも、適宜協力し合いながら無事にワークショップを終えることができた。「Listen」の概念も少なからず反映できたのではないだろうか。 終了後は大学に戻り、フィードバックの時間を設けた。個々の反省点を振り返りつつも、貴重な経験ができた、新たな視座を得ることができたという意見が多くあった。理論と実践を学ぶことができ、充実した3日間となった。

〈学生のことば〉

・音楽の意義や、人と協働するからこそゼロから幅広い方向に音楽が拡がっていくおもしろさを感じ、勉強になった。（ピアノ / 4年）

・社会情勢や音楽だけではない観点から積極的に視野を広げていく姿勢や、興味を持って追及して行くことの大切さを知り、些細なことでも調べながら視野を広げていこうと刺激をもらいました。また、自分がピアノを教えている生徒たちに、曲を進めるだけでなく、個人対個人でも感性を育む働きかけをしていきたいと思いました。生徒たちの知的好奇心を育むアプローチ法をもっと学んでいこうと言う前向きな気持ちになりました。（ピアノ / 4年）

・「自分」は「自分」であり、「自分」の強みを生かしてワークショップリーダーをすることが重要であるということが印象に残っています。それはワークショップ以外の他のシーンでも大切になるように感じました。自分の強みを生かしつつ、他のことにもチャレンジし、これからの活動をしたいと思います。また、グループ活動や子どもたちと関わる中で私の中の反省点が多くあったので、それを改善できるように、この授業で自分の中の引き出しを今のうちに増やそうと思いました。（音楽文化教育 / 3年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

おわりに

共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も、活動開始から丸 14 年となりました。

この 3 年間は新型コロナウィルスに翻弄されましたが、両大学とも今年度から対面授業に戻り、ようやく日常が戻りつつあることを感じております。さまざまな人とコミュニケーションすることをめざす音楽ワークショップも長らく実施ができませんでしたが、今年度になって少しずつ対面で実施する機会が増えてきました。コロナ禍を通して、楽器の使い方やコミュニケーションの取り方、そしてＩＣＴの活用といった面で変化を余儀なくされた点も多々ありますが、新しい要素を肯定的に受け入れ、今後のコミュニケーションに有効に生かしていきたいと思います。

本講座で学んだ学生と卒業生がそのスキルを社会で生かしていくことができるように、またその意義を社会に発信できるように、学外での活動機会をさらに求めるとともに、今後もさらなる人材育成を推進し、より幅広い世代へと新しい音楽教育を発信できるよう努めたいと思います。

末筆ながら、今年度もさまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。

2023（令和５）年３月

武石みどり（東京音楽大学音楽学部・教授）

共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2022 年度　活動報告書

2023 年 3 月発行

発行者　東京音楽大学　連携センター
〒 171-8540　東京都豊島区南池袋 3-4-5　B1005
Tel/Fax：03-3982-3227
Mail：music.communication.tcm@gmail.com

編　集　神戸女学院大学音楽学部　連携ルーム
東京音楽大学　連携センター

表紙・本文デザイン　上條浩史